

## 研究の葉

日本古建築研究の葉  
(第三十回)

天 沼 俊 一

第三十四 窓(上の中)  
室町時代

の連子も別に大して變りはなく、四角な棒に過ぎぬのであるが、其用ひ場所が大分擴張されてきた様である。即ち従來は大概建築物の窓に丈け用ひたので、夫れを腰貫以下に用ひた八坂神社樓門の如きは稀れの方であつた。窓といへば、すつと下の方につける風窓等も其中に入るが、先づ常識でいへば、建物の軸部の適當な高さの所につけるのが普通である。

然るに室町時代になると、大分に高い所へ用ふる様になつてきた。かうなると外から採光するのが主で、内から覗く事などは到底できない。これは高い所から光線を入れて充分其効果を大ならしめるのと、天井のあたりを明るくするのを兼ねしめたのであらう。

備中一の宮なる吉備津彦神社の拜殿は、三間四面重層切妻造檜皮葺の建物であるが、下層の方は廂になつてゐて本瓦葺である。上層と下層との間には雀よけの金網が臨時に入れてあり、頭貫と飛

貫間には連子窓がある。だから其邊から充分に光線が入つてきて——勿論そこからのみではなく、切妻の三角形の所からも澤山に入つてくるが——天井廻りは大變に明るい、従て内部は晴れやかでよろしい(第三五、六圖)。

大和國生駒郡伏見村の喜光寺金堂は、五間四面重層四注、即ち二重の佛殿であるが、夫れは外観丈けの事で、内部へ入ると單層と同じ様に上層迄突き抜けてゐて、大變に天井が高い。故に天井のあたりは、普通なら正面三つの大きな出入口を閉めてあれば大分に暗い筈であるのに、此の場合は正背面に於いては、間斗束を挟んで抖拱間一ぱいに(第二五二、二五七圖)、兩側面では中央の抖拱を挟み、其兩方の間斗束の間に、高さは何れも頭貫と最下段の通肘木との間に連子窓を設けてある(第二五八、二五九圖)。これも亦内部に採光する上に非常な効果がある。外から丈け見たのではよく判らないが、第二五九圖

の様に内からみると、その小さい高い窓から、この寫眞を撮つた時は初夏の日没後間もなくではあるが、光線が非常にきいてゐることがわかるであらう。

外國のゴシック式の耶蘇會堂には、クリアーストリー(Clearstory)といふのが用ひてある。夫れは大きなカシードラル級の建物になつてくると、随分天井が高いので、上の方に窓でもとらなければ、上の方は年中暗くて美事な穹窿も何も見えな。そこでネーブ(Nave)とアイル(Aisle)との高さの差の所に、即ち丁度アイルの屋根の上の所に大きな窓をとり、こゝから採光をする。こゝから入る光りは、窓が高いからよくきいて内部は大變に明るくなる。この高いところの窓が即ち「明層」(Clearstory)である。

明層は随分古くからある。大きな面積の建物になつてくると、内部が暗いから、ごうかして明る

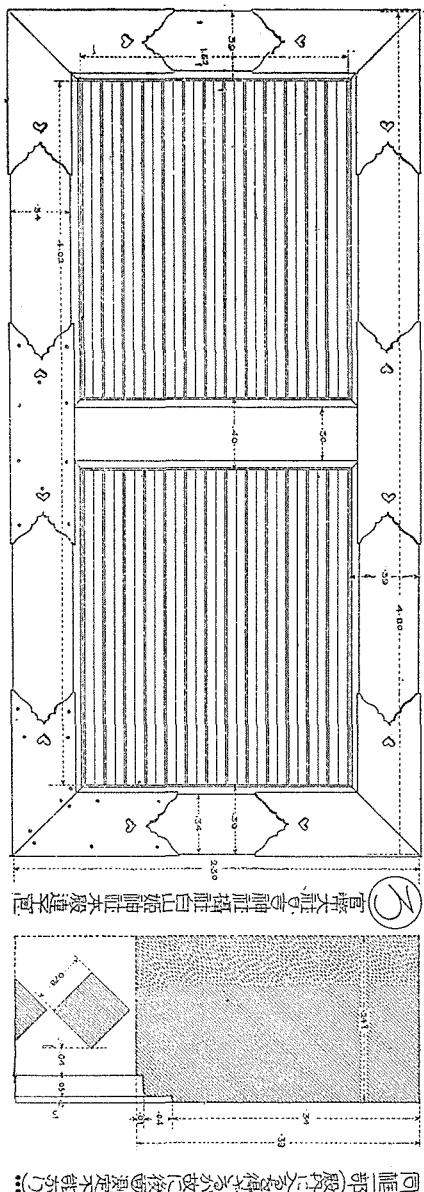
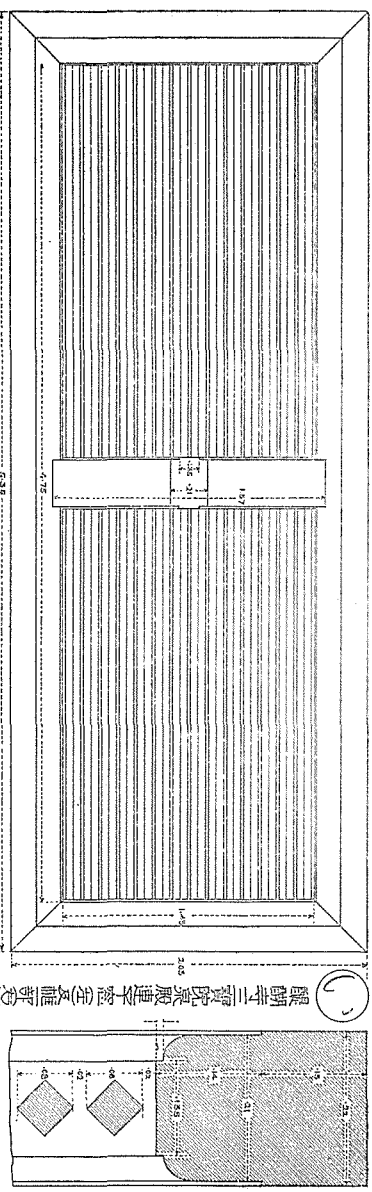
くしやうと思つていろ／＼考案をしたにちがひない。だから古代の人でも考へたので、埃及のカーナック(Karnak)に於けるアモンの大堂(Treat Temple of Ammon)にあるのが、先づ古い方で一番であらう。夫れから早期耶蘇教建築の所謂バシリカ會堂(Basilican Church)にてたりなどして、遂にゴシックの大會堂に於いて、極端の大發達をこげたのであるが、こんな風で外國の建物には珍らしくも何ともないのみならず、寧ろある方が普通であるが、我國のには珍らしい方で、漸くこれ等の建物に現はれてゐる位のもので、さう澤山はな

は、其第二層及び第三層の窓についてゐる。此塔は永享十四年建立とある、だから確に室町時代のものである。珍らしく唐様であるが、安樂寺塔婆(長野縣小縣郡別所村)程色彩は濃厚ではなく、蛇腹支輪や菱支輪が用ひてあつたり、連子窓があつたりするのである。同時に初重脇の間には連子入花頭窓があるし、二重三重の間には、出入こそできぬが、花頭型の出入口がつけてあり、其脇の間には連子が入れてある。今述べやうとするのはこれに就てゐる。

廣島縣豊田郡瀬戸田町に向上寺といふ寺があつて、三重塔一基が特建になつてゐる。昨年帝展に潮音山春色と題し、山田義雄氏筆の、忠實過る位忠實に寫生した繪をみた諸君子は、或は記憶してゐらるゝかも知れぬが、こゝに記さうと思ふの

或は當初はこの脇の間の連子窓は、現在の様ではなかつたかも知れぬが、今は第二六〇圖でみる様に上下に框があつて、夫れが柱へ尾入になり、左右の框を缺き、連子子は柱間一ぱいに入れてある。併しながら柱や貫等に比べると、框や子は新しい様であるから、後にかうしたのではないかとも思へるが、夫れにしてもかうしたとき、前例を





同框部(段ノ金釘ヲ不取ニ後動量ヲ減方)

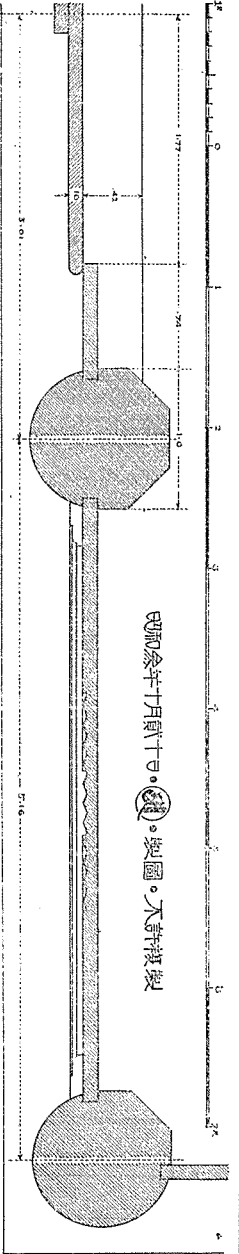
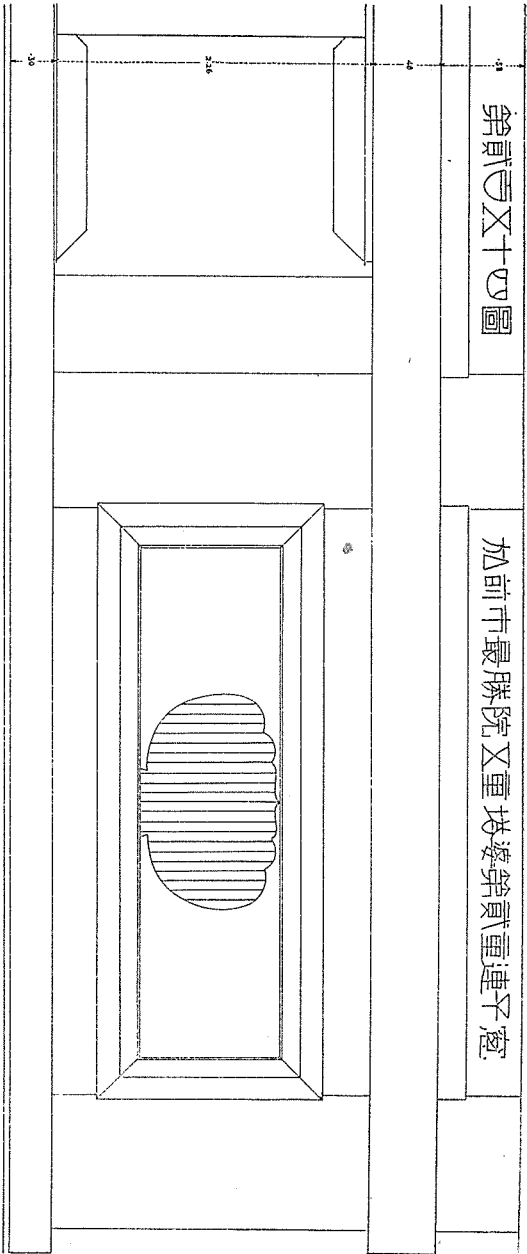
築敷⑤又十參圖・雫山時代連字窓取種⑥(昭和六年五月觀圖)

⑤ 高松寺(即社)神田白姫社此取連字窓

⑥ 醍醐寺寶院殿連字窓(取種部)

第貳拾四圖

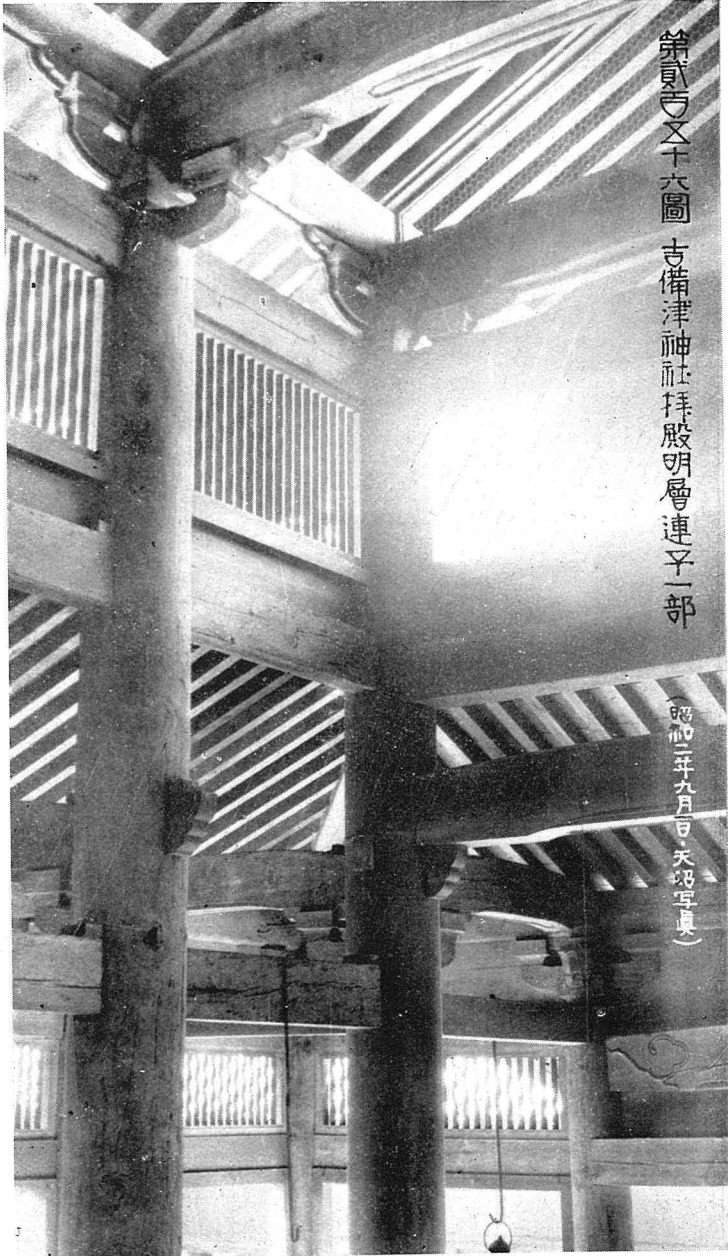
加前市最勝院又重塔婆築貳重連子窓



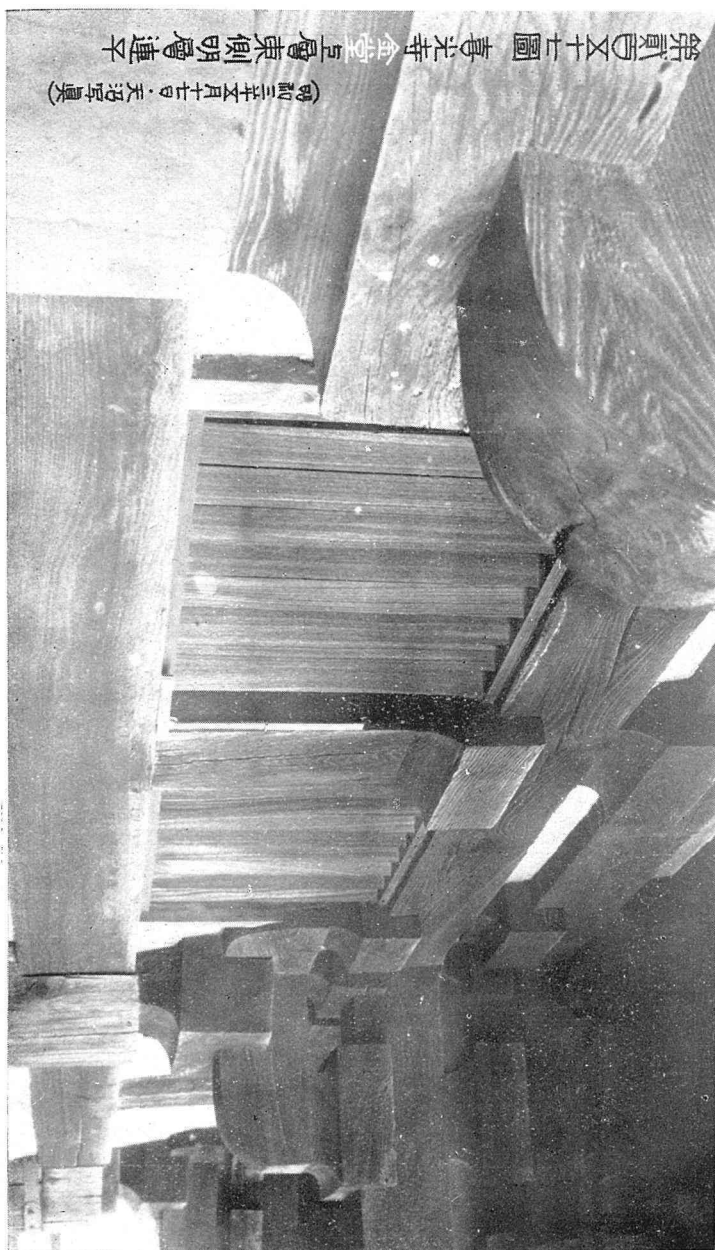


第貳百五十六圖 吉備津神社拜殿明層連平一部

(昭和二年九月日天沼写真)







樂亂の五十二圖 尊光寺金堂三層東側明層連平

(昭和三十三年十月・天沼淳)



築武田八圖 喜光寺金堂是層北側明層連下

(昭和三年五月七日・天沼重直)

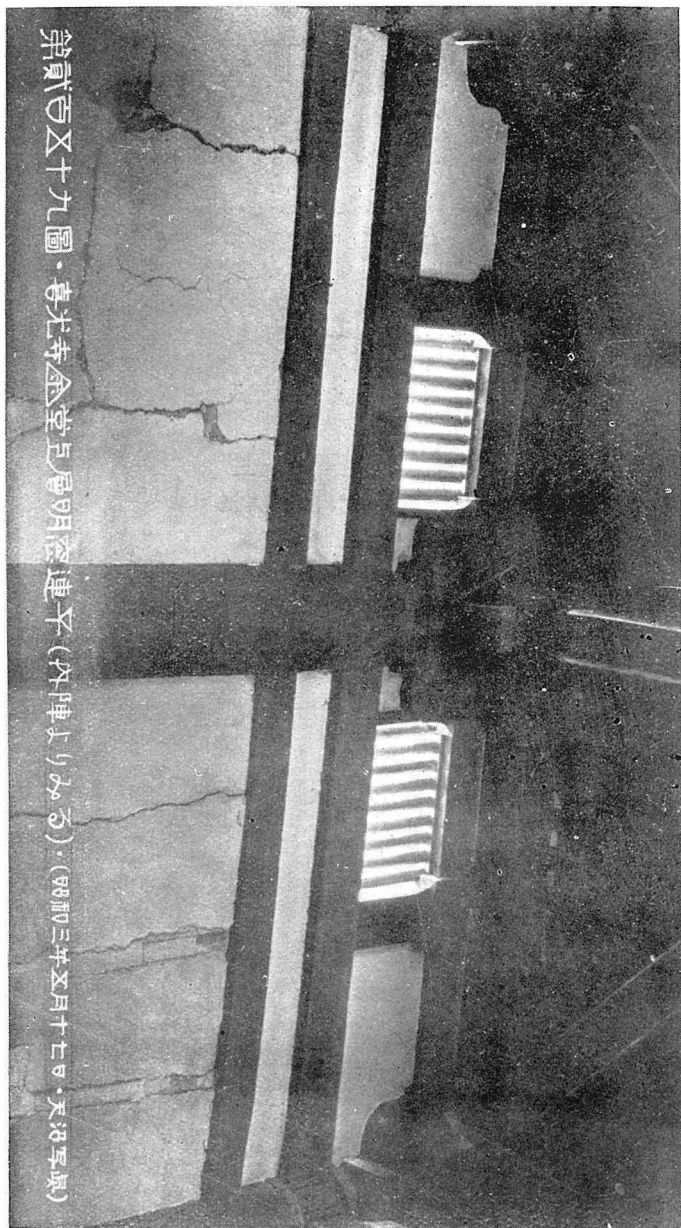
第十四卷

研究の葉

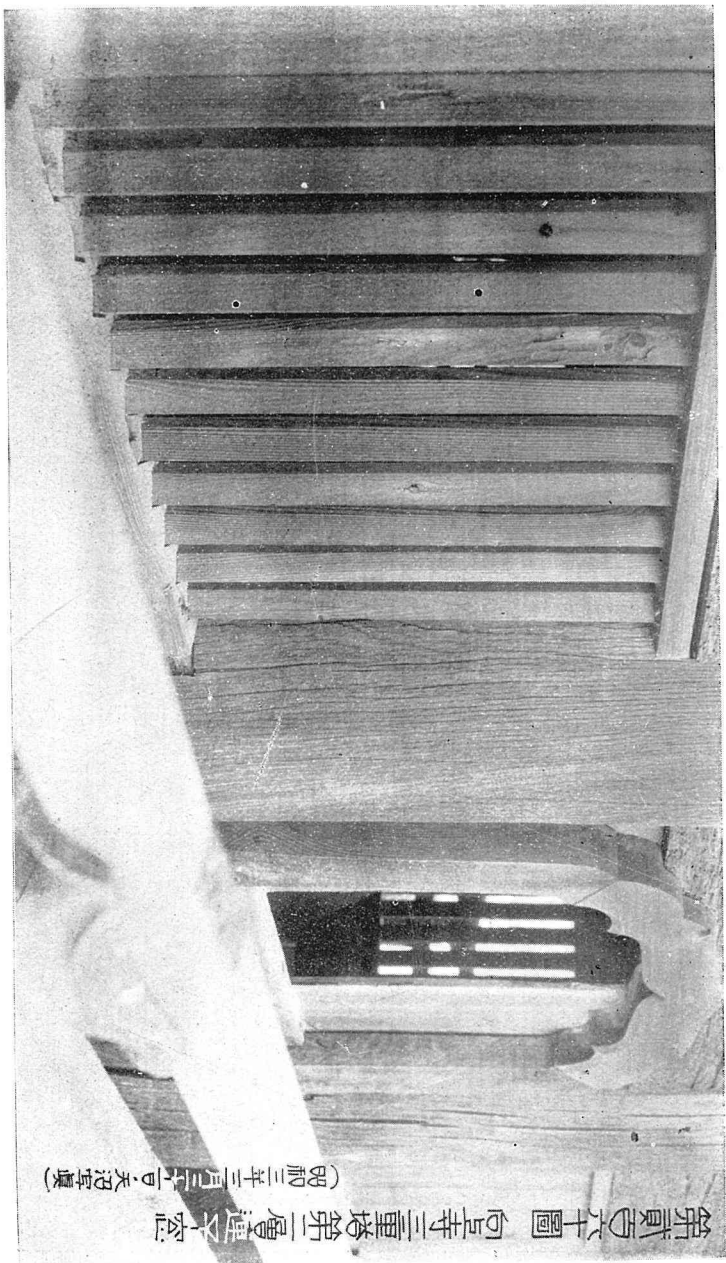
日本古建築研究の葉(三十)

第二號

六三(二二三)

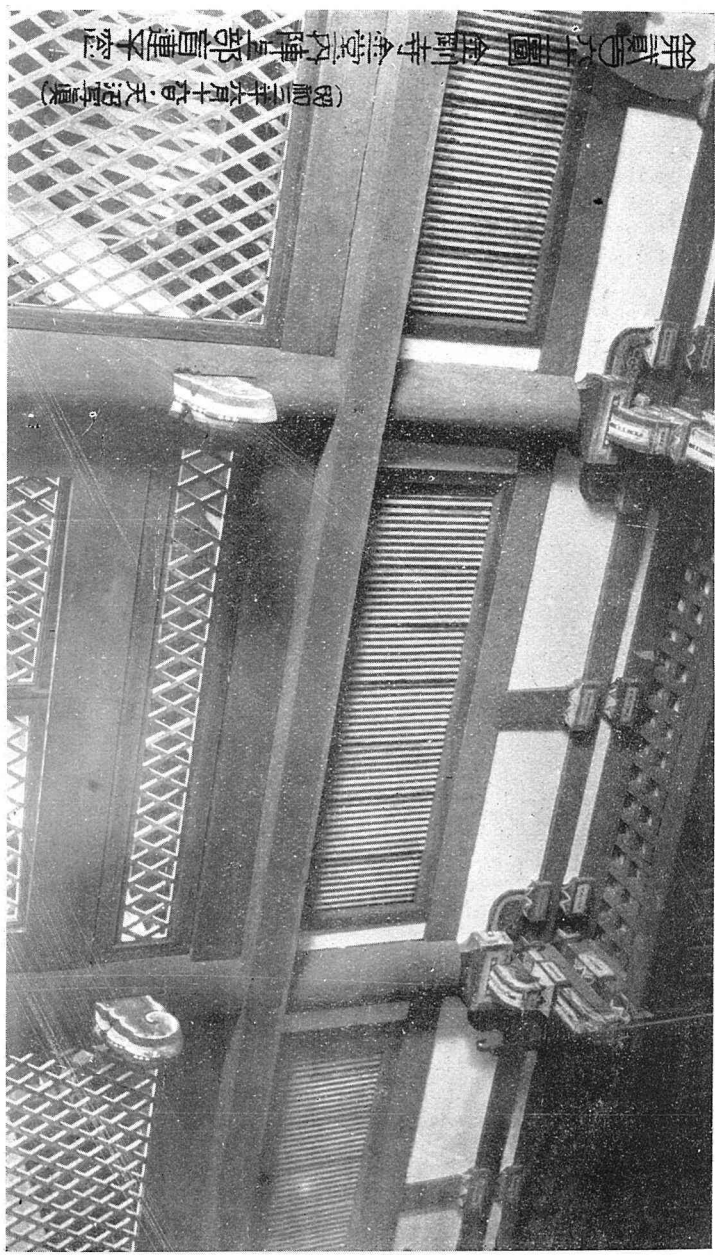


築紫西八十九圖・喜光寺金堂且層明窓連平(内陣よりみる)。(昭和三年五月十七日・天沼亨原)



(昭和三年三月七日、大塚宮内)

新蔵の七土圖 向寺三層塔第二層、透之窓



金戒寺五子圖 金戒寺金堂内陣皇御直連字窓  
 (昭和二十五年十月・天沼重慶)



圖六十六百第二  
窓平連殿泉寶院三胡醜

昭和三年四月二十九日



(天沼写真)

第貳百六十四圖 教王護國寺金堂連平窓一部

(昭和三年五月三十日・天沼写真)





踏襲したとも考へられる。尙ほ前號第二五一圖に金剛寺鐘樓の連子を掲げたが、恰もあれの様に、これも亦花頭と連子と併用の例としてよろしからうと思はれるのである。

室町には花頭窓の袂間飾として連子を用ひたのがあるのは、既にこゝに述べた此塔の初重の窓に於いてみるところであるが、斯様なのはこゝに含ましてない。花頭窓の内に連子を並べたのは、もう少し先きに記すことにする。

時には軸部の柱間の白壁の所へ横連子の窓を用ひたのがある。この場合、連子の間はあいてはゐるが、殆んどこゝから來る光りは何にもなつてゐぬのである。其例として上醍醐清瀧堂拜殿正面のを舉げる事ができる。其全形は第二六三圖の様なもので、横に三つつながつてゐると思へばよろしい。連子及び框の詳細は第二五二圖(㉒)にだしておいた。

法隆寺東院歩廊は室町時代のものといふことになつてゐる。其連子窓は第二三四圖(㉓)及び第二五二圖(㉔)に一部分をかいておいたが、夫れ等に記入してある寸尺は何れも皆異なつてゐる。各窓では勿論、一つ窓でも上下左右で寸法が同じでない。一見同じに見えても、調べてみると一つとして同じものはないのであるといふ一例に出したのである。連子の間隔は割合に大きい。

金峰山寺本堂といつては通じなくとも、吉野の藏王堂といへば誰人にも直に判るであらうが、あの上層正面兩隅の間には、それこそ他に類例のない(？)珍連子が入れてある。この部分は全體板壁で縦板が張つてあるが、其板の中央よりは上の方適當な位置に、框も何もなく、たゞ其縦板に連続した「やまがた」が刻みつけてある。當初は、どうであつたか知らぬが、現在は一面に胡粉で塗りつぶしてある。だからそばへよつても、うつかりして

ゐれば氣がつかない位である。況やあの大きな建物に於いて、上層には椽も椽勾欄もあり旁、下から見たのでは、遠眼鏡で覗かぬ以上、如何に視力の強い人でも、到底見出す事はできまいと思はれるのである、而も夫れが盲連子であるのだから、全く以て何のためにつけたのか了解に苦む次第である。これが私の今迄みたくの最珍のものである。つまらぬ所につまらぬ事をしたものだと思ふより他に仕方がない様である。

要するに當代のは

稀れに軸部の下方に用ひたのもある(八坂神)が、

普通は窓の位置にあり、時には明層に用ひられ

(吉備津彦神社拜殿・喜光寺本堂)たりした。連子には間隔の割合に

廣いもの(法隆寺東院歩廊・院步廊)と狭いものあり。又盲連子も

あつた。框は飛鳥系統の四角なもの(法隆寺東院歩廊・向上寺三塔)も、幣軸も同じ様に唐戸面をとつたのもあつ

たが、稀れには全く框のない(金峰山寺本堂上層)のもあつ

た。佛壇や天井廻椽の下に盲連子を入れた例は相當に多いが、何れも前代の繼承である。

といふ事にならう、落ちがあつたら後に加へることにする、次の

### 桃山時代

のものでは、先づ第一に建物の内部上方に、盲縦連子を入れた例を圖示する。第二六一圖でみる通り、長押上頭貫上の柱間毎に、鎌倉室町式に連子がある。この本堂は鎌倉時代にできたものだが、今のは桃山に大分手入がしてある。この連子は古いのかも知れぬが、どうも桃山ではないかと思はれるので、こゝに記したのである。

第二五三圖②・第二六二圖は、近江阪本鎮座官幣大社日吉神社攝社白山姫神社本殿裏二連連子窓である。子と子との間は極く僅かあいてゐるだけだから、そこから少し許り光線が入る筈である。さうして框には要所に飾金具を打つけてあるが、

全體としても木割は割合に太く、ごうも大して洗練された形ではないやうである。この建物は天正十四年。

第二五三圖⑥・第二六三圖は、醍醐寺三寶院表書院泉殿の白壁についてゐるもので、前のに比べると大分にきゃしゃになつてゐて、丁度上醍醐清瀧堂拜殿の三連連子窓の式(出前)のものである。この手の醍醐式連連子窓といふならば、前者は日吉式といへるので、日吉神社には本殿にも他の攝社にも、總てこの式のがついてゐる。三寶院殿堂は慶長三年だから、其間にきゃしゃになつたのではない。種類が異つてゐるのである。

第二六四圖は教王護國寺金堂の連子窓を、少し無理をして長押の上に寫眞機をのせて寫したものである。だから長押の内に入つてゐるがらくたが寫つたのは少々まづいが、連子窓の框の面の工合も同時によく判るであらう。即ちこの時代位にな

つてくると、これも亦幣軸と同じ様に面が角張つてくるのだが、直に領かれるであらう。さうしてこの場合は、框を赤、面を黄、連子子を緑で塗つてゐるから、餘りうるさい感がある。

以上で先づ一通りつくしてゐると思ふが、當代のもので椽下に連子窓を用ひたのが、茨城縣鹿嶋郡鹿嶋町官幣大社鹿嶋神宮攝社與宮(慶長九年)にある。既に記した通り(前號第一二二頁、下段八・九行)、たゞ其位置が變つてゐる丈けである。

稀れに椽下に用ひた(鹿嶋神宮與宮)。内部天井廻椽下には餘り流行しなかつた様である(金剛寺)が、當代に横二連連子窓を用ひた例もある(醍醐三寶院泉殿、日吉神社本殿及攝社)。框は一般に其面が角張つてきた。框にいろ／＼彩色をしたり(東寺金堂)、飾金具を打つたり(吉神社)したのもあつたが、連子子は殆んど常に緑であり、稀に青漆塗のもあつた(園城寺金堂、慶長四年)。